

1974

象と逢う朝

仲山 清

WANI-PRODUCTION

大男

わすれない岸辺で
おおおとこに会った
夕陽のようなまなこが
さだまらないふたつ

「許した」と
かみなりよりも遠い声でいった

ハンマーひとつで
許せるなにがあったか
おれは知らない
だが じつにほらあなのような
おおきなおとこだった

「どこか 釘でも打ちに
いくよりしかたがない」
おおおとこは
ふりむきもせず
あの川をまたいで行った

槍

おとこがひとり
満月をみている
影がおとこだ おとこが影だ
そんな夕べ

椰子がかたむき
おとこがたおれ
槍ばかりつつ立ち
満月をみている
そんな夕べ

ゆうだちが夕焼けを始末し
始末されないおとこはぬれ
雨おとがしろい蛇のように這いまわる
ジャングルに夜がくる

槍のさきは
おとこの脾腹で
ねむたげな人形だったか

槍のさきは雲を裂き
すこし傷つけて
月をよんだか

それから槍はいつびき
月のおる道先廻りする

壁

壁のまえの
壁をたててやりながら
その壁と対になって
なんとなく壁のようである

壁と壁のあいだには
もういちまいの壁がおちこんでいて
鳥などが
首ごとわすれさられている

どの壁にだか
ときに はげしく
しょうべんをひっかける
さびしいおとがする

けりをつけようじゃないか
どなれば
おもいがかない壁までが
どなりかえす
けりをつけようじゃないか

鳥のぶんだけ
まえにでろ
どこの壁だか
やくざなことをいう

つめをたてても
おれをたてる壁はない

象と逢う朝

いつかまた象と逢えるのだと
ぼくが生きているばかりに
象のゆめしか見たことがないかあさん
象と象のたわいないあいだで
酔いつぶれるかあさんをしりめに
あらそわなければならない
二頭ぶんのりくつもあるのだ
かあさんの悲鳴はもう一頭の
象のかたちをとるだろうし
三頭の象は鼻をぶらぶらさせて
いるだけだろう
ぼくのむすめがはじめて
象と逢う朝
象とさえつながれていない象とつながれた
かあさんのしわだらけの腹に
千頭の象よりもいたわりぶかい
目をむけているにちがいない
ほんとうの象よ
ほんとうに象なのよと



雨

雨はどこを降る
ひだりの耳のひろがりをついに鳴らぬ鍵穴を
闇のなかでの挨拶を降る

雨はなぜたたく
生皮の記憶を
めくれあがる高さを
うしろ手の火をまたなぜたたく

雨はいつぬらす
立ち去るばかりの宣告を
儀礼と棒のあわいを
いまつかみあう自由をぬらす

椅子

これがきみのための
きみにだけ到る椅子である
腰とともにあらゆる
疑いを引きおろす椅子である
膝のみが組みかわる哲理は
きみのその姿勢が支え
椅子にならってころげ
あるいは声高にわらえ！
きみから椅子が欠落するとき
雑駁な部屋できみ自身こそ
死のための椅子である

栓

きちんと栓をされて
ぼくはねむった
けれどもそっとしてはおけず
さらにふかい眠りへ
しずむ栓のように
ぼくの寸法は自在だった

闇はあふれたくらさを恥じたか
敷居をまたぎ
とりかえしのつかない夜となった
ぼくはあかるく
からっぽだった

それから雨戸が鳴りだした
搔痒のような雨風が
ぼくをうまいぐあいに満たした
ひきかえして来はしないかと
鍵穴から壁の画鋏へ
ともす釈明はないものかと

ながいながい溜飲のはての
いじけた栓のような
だれにも解せぬ時刻だった
てのひらでもまにあわぬ
しずかな朝だった
あいつが打ちあげる花火のおとを
ぼくはぼんやり聴いていた

兆

霧の内輪でもとりわけ
霧と目される流れを
魚がにおってくる
意味のないひとことずつの
冬の街路樹から
つと口つぐむくだり坂
うっすらと血を予感した
盲目の庖丁は
凍える家 ひとつの分際へと
痩せた膝をくりだす
白い息をつめた
紡錘形の光を横たえ
暗く実質的な頭部を
撃ち落すのだ
胡瓜のふるい切口や いまだに
手を切れぬ人びとの真っ只中で
死が裾をととのえ
霧を含んでふくらんだ
白木の板塀へ声高にのしかかる
流れを骨ごと
そっくり受けついだ切先は
未練な狂躁を一挙にはらおうと
そりかえったのどごし
空前の糸へ接近する

尻あがりの椅子

どろ足が
みるみるひからびる日ざかりだ
白があって
黒があつての風景を
ぼろっとくずれるように走りぬけ
されるままのとびらをおして
毛糸玉のようにころがった
泣きじゃくる階段をのぼり
尻あがりの椅子で
へんにさとりきった天秤のように
ぶらぶらしているばかり
あいつが鬼ならツノ
ねこなら首っ玉
しらをきったつらなら二枚の耳
ひっつかまえてげんこか
それともびんた
好みをきいて喰らわせてやろうじゃないか
たてあなへしのつく何万年もの雨
あふれてやまぬものを
謝罪の海におとしいれようとするあいつと
日ざかりのゆるい傾斜をめぐって
あらそったちいさい足よ
いっそ切ってくれろと
しなびた足よ

函

ふたも 底もない
ほんの気持だけの函をつくる
愛せずにぼくがそだてる釘は
経文のようにだらだらとながく
そろって板の意表をつきぬける
四枚のむきだしの沈黙が
うっすら深まる四隅で
忍び笑う声もあり いたたまれず
さきを争って錆びつくものもある
羽目板や どぶ蓋なら
息絶える街まで
むじゃきに吼えていけたろう
くされ縁なら腹いせに
蹴りぬくこともできたろう
見えすいた函だが
釘さえ ぬかれでもすれば
ふたたび顔をあげず
みずからをつぶす覚悟だ
よろしい 四枚の板が背を向けた世界で
ぼくはかなづちをとる

孔雀のはねを抜く

人気のたえた動物園のオリのなかで
孔雀がはねをひろげていた
そのはねの一本を
彼女は金網ごしに綱ひきでもするように
ついにひきぬいてきた

彼女はすっかり孔雀のつもり
叱ることもできず
はね一本の壮挙と化身を
家族はこっそり祝したものだ

エメラルドの
ゆびをまるめたくらいの水玉もようが
はねのさきにひとつ
それさえなければ（とは もはや
だれものぞみはせぬが）
背にこそばゆい
ススキまがいのしろものだ
しかし がんじょうな根もとは
なまのままの
孔雀のしろいほね

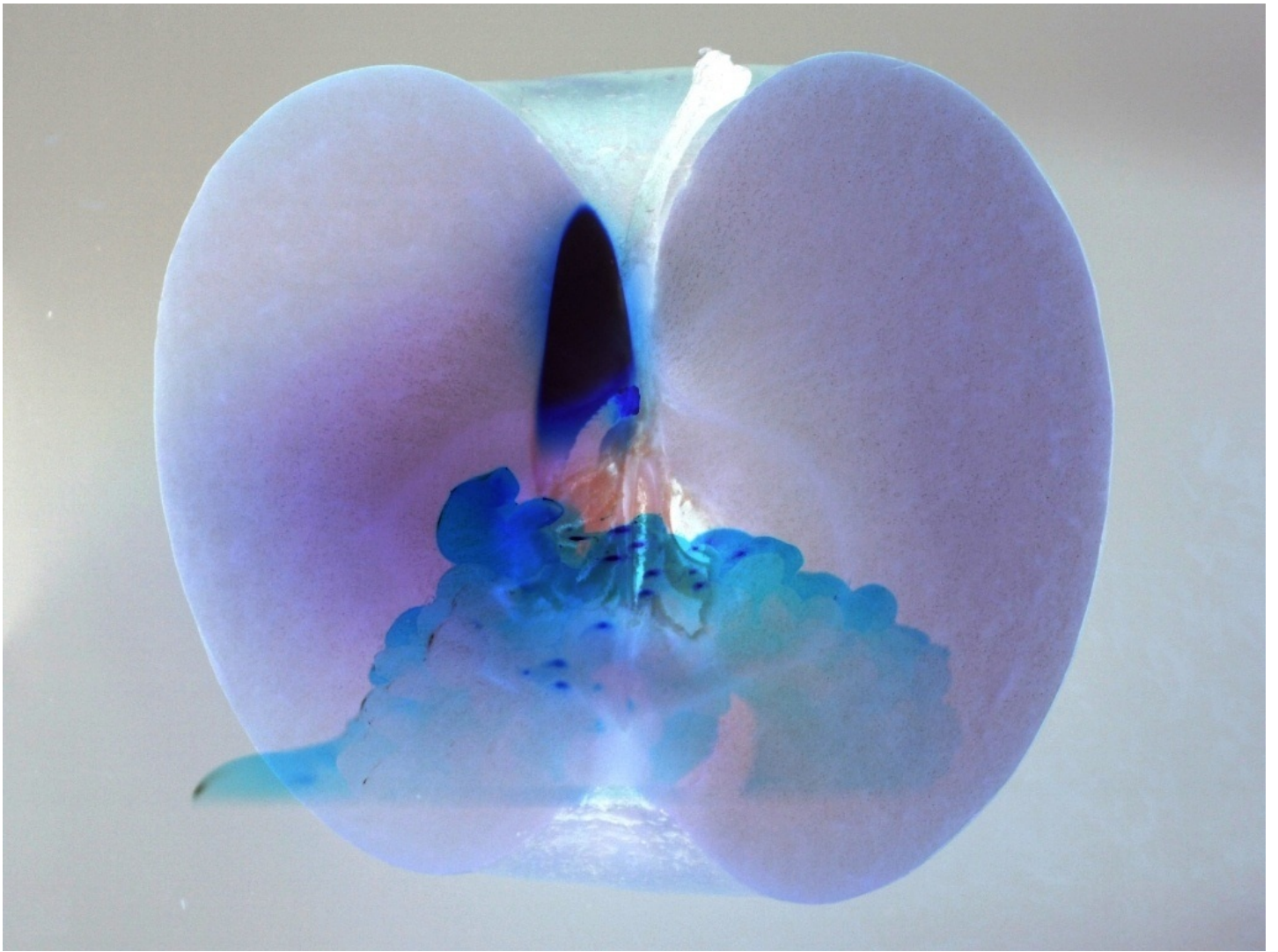
うしろ手にかざし
スカートのすそをつまんで身をひねり
ふみだした足はしようもない
ひとのもの

「さあ だれか
さいごのはねをぬいて！
金網がここにあるとしてよ」

盲従

なにが不足で
からっぽなのか
煮えきらぬ函をぼくはならべた
あちらでもこちらでもない塀ほどの
気ままな歳月を
ならべついだ
千人が千人 塀のかたわらを行けば！
と信じていたのだ
あっさりひきはがせる気もするが
なまじはがせば
ついでに世界もごっそり抜けてしまいそうで
それにしてもながすぎると
千人が千人うたぐりはじめ
うたぐりだしたらきりもなく塀はつづき
ぼくはやっぱり函をならべつがねばならぬ
ついにかれらは塀とよぶのをやめ
かといって塀をのりこえ
そこにからっぽの函を見出す勇氣はだれにもない
りくつにあわない函の
つじつまをあわせ
ぼくは函を積みあげた
それみたことか のりこえられるわけが
あるものかと 千人の九百九十九人までが
いばりちらすのだ
わかったふうな立方体に
まるくおさまった忍耐のような物質から
なにが不足であふれでる風
つつい吹かれてころげおちるぼくを
目撃した者がひとりいて
身もふたもない世界で
ぼくはただひとつの身となり
いきなりふたをされて それもどうやら

あいつが積みあげた函の底らしく



鬼どうし

どこから手をつけたものか
ぼくは軀をくしやりと折って待った
爪のあいだからにじむ汗で
輝くばかりに待った
やがて ぼくはひとつかみの
塩になるかもしれない
しわだらけのまま
ぼんやり花ひらく あわててまた
くしやりと軀を折った
堂々めぐりのあいつののぞみが
どうころんでも果たせる類のものなら
ぼくはあれきり
息をふきかえさずともよかった
そのくせあいつを想いだしては

あいつをまねてころげまわり
左にまわっては
ところてんをぶちまけ
右にまわっては
庖丁を手にした
おもいえがいた円が
目をまわすほどに臭い脚を組んで
ぼくはつぶやく
鶏にでもくれるように
ありあまる恨みごとをバラバラッと
撒きにきたらどうだ
石ころのように突きあげる
赤の他人の照れくささを
いっそぶつけにきたらどうだ
塩分でしかないおれの
どこから舐めてかかろうと 手をつけたがさいご
それはおまえの自由を唾棄することだ
鬼なら鬼らしく
帰って来い

センチメンタル・ネギ

葱は泣いた
固唾をのんでひとが出ていく
不祝儀な夜の廂から
いきなりくすぐったい話の
ひげをさらして
葱は泣いた
泣きながら ぴしりと伸びた
まっさおな空洞を
葱は呪った
嗚咽だけが引返してくる空洞を継いで
あなたにもゆくりなく
鼻につんとくる夜は
台所はなんと
陰湿な塔となり
はるかに聳え立っていることだろう
だれかがまた固唾をのみ
あなたがこらえきれず笑いをもらすところに
杭がうたれ
鞭が霧をくゆらせてい
葱は泣いた
月がかかるとど笛を刺して
葱は泣いた
血と 土を吐きもどし
すこししびれた葉末をふるわせ
もはや何者にも朝を告げぬ
生坂にすがって
泣きじゃくった
冗談だったあれから
鳥肌立ったままの凄惨な風呂あがり
他人のあなたに
葱はふかくきざまれたか

一家皆殺し

台所の灯はしなびて
レモンのようになまあたたかく
おれはほそくちぎった
地図の一点でながいこと見あげていた
あれへ行きつく階段は
たんねんに洗ったすね毛の濃い
あしをかける煮えたった階段はどこだろう
おれはすばやく歩き めざす一家を
とりちがえるはずもなく
平均台のような地上をひきかえす
台所の人影には
あの日おれの怒りをかった頭部がない
あいつをうつむかせたきりの料理
こんどはだれとの悲惨な晚餐だ
レモンの内部のもっとも輝かしい夜に
朝までは待てぬおれを見透かしたか
地図の上の気狂いじみた一点に
虫ピンをたて さらにつよく突刺してくる
台所の灯はしなび
ついにかき消えた下で
おれはうろたえ はずかしい気がした
まだ刃をひらかずにいた果物ナイフが

銭湯

おれの人生の唯一で贅沢な喜びは
週一回の休日 午後三時に
一番乗りで銭湯にはいること
がらんとした脱衣場で
ちゃちな怒りや悲しみを脱ぎ捨て
純粋な蛋白質にかえる
じょう舌な湯気を黙らせにさっそうと
湯につかっちは分解しそうなのをこらえてじっと
傾きかけた陽が
膨大な曇りガラスをおびやかして
ずばぬけた明るさ
湯と石鹸と午後の時間を存分に浪費し
ありふれたからだを磨く
陶工のようにきちょうめんに
馬喰のようにあらあらしく
鏡のなかには なかなかの男前がいて
眉をうごかしたり めつきを鋭くしたり
コブシをきかした唄もでる
おれの人生の唯一で贅沢な喜びがきわまり
ふたたびちゃちな怒りや悲しみを身につけて
まっさきにおもてへ出る
だれもがまぶしげに見る
赤みがさした顔に それでも苦汁のしみが甦るまでに
たっぷり二時間はある

火の手

動物園のオリのなかで
あるいは荒野で
背からずぶずぶ沈んでしまいそうな
へんに弾力性のある夜の岩にしゃがみ
おれこそ未来に生きのびる
たった一頭の気がして

はるかに火をつけ
つけられるやつ
人類のおもいでよりも
高く 清潔な火の手をあげて帰ってくるやつ
その火をかぞえ おれの目は
うるんだ砦
砦を越えておれを抱きしめた火よ
それきり夜の岩をはなれなかったのは
火を交わらせぬため
火と火のあいだの闇に行く
最後のたましいのため
岩があり ふたしかな
岩のうえにかろうじておれがいて

おれはまたもゆすぶられる
荒野で
オリのなかの蒸れた片隅で
つめたい手によって

豚のためのミサ曲

豚が空を飛べるようになるまで
愛していさえすれば豚も
大根ほどには痩せるだろうし
神だか鬼だか痩せた欲望に
翼を授けるだろう
大地を走りつづける駝鳥は
はてしなく豚だが
孔雀さえ見かけだおしの
尾のむこうで豚だが
豚が耳を落とし
鼻をつめる分厚いまないたをこそ
恐れねばならぬ
教区にミサがながれ
晴れた屋根の上の豚
風の藤棚にひそむ豚が
風切を繰り 飛び立つ午前に
式を挙げよう (せめて指環のための
指はのこりますように)
どぶ泥をどよもす鐘が打たれ
魚肥にまみれる初夜
あすはだれに抱かれようとも
距爪けづめのはしった肌をかくし
豚のいない大まじめな空をスジと
皮になるまで見ている
花嫁よ
あれほど信仰された豚が
たんぽぽと飛び去っていま
だれの冷凍室に吊るされているか

手料理

おれの想う肉に
水がたまるまで
おれの一挙手一投足に
みずごけがはりつくまで
そしておれの休息を
魚どもが喰いつくすまで

きみはあの湖をしめだそうとした森の
はるかな怨念のような炭火を
にらみつけていなさい

おれたちのぶっきらぼうな
虚無の金網を熱くしておきなさい
死臭がたちこめたら
言いたいことがまとまったら
湖に面した窓をあけなさい

生きているきみがなしうることは
そこまでだ

ふりかえった金網のうえで
裏がえされたもの
それはおれの掌のようなもの
きみの鼻と口とを同時にふさぐもの



コップ破り

コップ破りの
鍋釜泣かせの
どら水が
コップ破りの
ウサギ殺しの
痩せ水が
水血症の思惑の突堤で
毛皮を着けて立ちどまる
氷柱つららの愛ののどがひらく
陽がのぼる
とけるコップ破りの
弱視の
ひね水が
大腸菌とぼうふらと

泳ぐ爪とかたむくほほと
あふれるおそれに
みずからに喰いさがった吃水線よ
コップ破りがしみわたる
大火の暗がり
涙ぐんだあの眼を屈折し
ふたたびコップに舞いもどる
くせ水が

これをしおに
花でもさしてくれようか

おわり岬

去り行く岬に
友よ といいかけて
火の齒を鳴らし
風のうでをはげしくまわす
おれたちは出会わなかった
そう信じこむまでに
ひとつの漁村が砂に埋もれ
さかなくさい樽はころげまわった
愛よ といいかけて
身にあまるとまどいのうちに
海をうしなったふね
ふねをうしなったながい曳航の夜
ここ さみしく暗鬼がうろつく
おれの岬
そこからさきはきみの
海鳴り きみのカモメのむれ
だからいまはまわせ風のうでを
二度と抱きとめられぬために
そして見届けるのだ
ゆがんだ地形を照らして
燃えあがる顔を
きみ自身の顔を